IS～先導者とイメージ～

永遠なる自由の剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～先導者とイメージ～

【Ｎコード】
Ｎ１２５４ＢＡ

【作者名】
永遠なる自由の剣

【あらすじ】
いつものようにファイトをしていた櫂。
そんな彼を突如光が包み込んだ！目を覚ました彼がいた場所はなんと、ＩＳの世界だった！

第1話　異世界へ

「ファイナルターン！」

耀はいつものように強者を求めて裏ファイトをしに来ていた。

「竜は不滅、吐息は無限！魔炎イモータルフレイム！」

「負けたぁ……」

（口ほどにもない奴ばっかりだな）

裏ファイターの中にも耀を楽しませてくれるような人物はいないらしく耀はため息をつく。

耀はファイトが終わったのでグローブを外そうとしてあることに気づく。

ファイトが終わったのにユニットが自分の回りに存在しているのだ。

（ファイトは終わったのになぜ…）

その時、耀が先程使っていたブレイジングフレアドラゴンが咆哮した。

次の瞬間、眩い光に包まれ耀はその場から姿を消した。

第2話　始まり

「初めまして、副担人の山田真耶です」

眼鏡をかけた女性が黒板に自らの名前を書き、自己紹介をしていた。

「最初のＳＨＲは皆さんに自己紹介をしてもらいましょう♪」

出席簿を見ながら名前順に生徒の名前を読み上げ、呼ばれた生徒は自己紹介をしていった。

そんなどこにでもある風景の中で一人、頭を抱えている少年がいた。

彼の名前は織斑一夏。高校1年生になったばっかりのどこにでもいる少年だ。

なぜ彼が頭を抱えているかというと

（クラスメイトが全員女なんて……想像以上に辛い……）

一夏が一人考え込んでいると

「ーーーくん、ーーーくん、織斑一夏くん」

副担人の山田真耶が顔を除きこんで名前を呼んでいた。

「はっ　はいっ」

一夏は慌てて立ち上がる。

「ひゃっ！？」

一夏が立ったことに驚いたのであろう。
真耶がびっくりして声をもらした。

「あ……あの…お……大声出しちゃっ…てごめんなさい……お…怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね……ゴメンね！」

真耶は一夏に何かされると勘違いさしたのか執拗に謝ってくる。

「でもねでもね、自己紹介って『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね…」

「あの…そんなに謝らなくても……しますから、自己紹介しますから」

一夏が説得するように言うと

「ほ……本当ですか？」

少し安心したように聞いてきた。
するとそこに扉をあけてスーツを着た２０代半ばの女性が入ってきた。

「新学期早々騒がしいぞ、織斑」

そう言いながら教室に入った瞬間教室が一気に騒がしくなった。

『……き……』

『キャ――――――！千冬様！本物の千冬様よ！』

この入ってきた女性の名は織斑千冬。

織斑一夏の姉だ。

「毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ……関心させられる…

それとも私のクラスにだけ集中させているのか？」

千冬が呆れながらため息をついていると

ドォォォォン！

外から物凄く大きな音がした。

「山田君！君は教室でこいつらを見ていてくれ！」

「織斑先生はどうなさるんですか？」

「音のした所に行ってくる！ここは頼んだ」

千冬は教室を飛び出てアリーナを目指した。

するとそこには大きな穴があり土煙が舞っていた。

（攻撃？そんな馬鹿な）

土煙が晴れてくるとそこには制服を着た少年が倒れていた。

（気を失っているようだな……保健室に運ぶか…）

千冬はその少年を担ぎ上げ保健室へと向かった。

騒ぎが騒ぎなので自己紹介はまた明日やることになり真耶と千冬は保健室へと来ていた。

すると少年が目を覚ました。

「ここは？」

「ここはＩＳ学園、お前は何者だ？」

横から声がしたのでそちらを向くと眼鏡をかけた女性とスーツ姿の女性が椅子に座りながらこちらを見ていた。

「俺の名前は櫂トシキ……ＩＳ学園とは何だ？」

「私の名前は織斑千冬、こっちは山田真耶だ。私たちはＩＳ学園の教師だよ。さてお前の質問だが、ここは女にしか反応しない兵器、インフィニットストラトス、通称ＩＳの操縦者を育成する学園だ」

千冬が説明してくれたが櫂には訳がわからなかった。ＩＳ等という兵器は自分の住んでいる世界にはないのだから。

「次はお前が何者なのか教えてもらおう」

「俺は――」

櫂は話した。カードゲームが世界レベルで流行っていて自分は先程

までファイトをしていたと。そしてＩＳなど知らないということも。

「この世界ではないところから来たと……信じがたいが信じるしかないな……お前これからどうするんだ？こっちの世界でやってくしかないんだろう？この学園に入学するか？」

千冬が色々と聞いてきた。

「入学するにも俺は女じゃない。ましてやＩＳ等持ってない」

「それは心配いらん……」

自分の考えとは違う答えに困惑する櫂。

「お前のその手にはめているグローブがＩＳだということがわかったからな」

「何だと！？」

「さぁどうする？少なくともこの学園に入学すれば３年間は安全だぞ？入学しなくても良いが金も家も戸籍もないお前がこの世界で暮らしていくには厳しいと思うがな」

櫂はその場で色々と考えたが答えは一つしかなかった。

「入学……しよう」

こうして櫂の入学が決まったのだった。

第3話　出逢いと特訓

その日、櫂は誓いながらから鍵を渡され用意された自分の部屋と向かっていた。

この学園は寮性なので住むところには困らない。

「ここか……」

櫂が部屋に入るとそこは高級ホテルのような部屋だった。寝室のベッドの上に制服や日用品、参考書やノートが置いてあった。

（シャワーを浴びて寝よう）

櫂はシャワーを浴び終えるとそのまま寝てしまった。

次の日の朝、制服に着替え職員室に向かうと千冬が待っていた。

「お前の入学手続きを済ませておいた。それからお前は転校生という扱いになっている」

「わかった」

「これから教室に行く。私が呼んだら入ってこい」

それから櫂と千冬は教室に向かって歩きだし、櫂は教室の外で待っていた。

「突然ですが今日は転校生を紹介します♪」

（転校生……また女か……）

一夏が絶望してぐったりしていると

「転校生…入っていいぞ」

千冬が喋ると教室の扉が開き、男子が入ってきた。

「簡単に自己紹介をしろ櫂」

「櫂トシキだ……」

「あのぉ……他には……？」

真耶が問いかけるが櫂は無視した。

すると教室の後ろの方から

『…き……』

「き？」

『キャ――――――！男子よ！しかもすごくイケメン！』

『つれない態度がまた良い！』

『結婚してトシキ様――――！』

（な……何だ……これは…）

余りの出来事に櫂は驚いてしまう。

「五月蝿いぞ馬鹿者！櫂は空いているその席に座れ！」

櫂が席に着くと回りの女子は顔を真っ赤にしていたが櫂は気にしなかった。

どうやら櫂が来るまでの間に自己紹介は終わっていたようだ。

「櫂トシキだっけ？俺は織斑一夏だ！よろしくな」

一夏が話しかけてきた。

「あぁ……よろしく頼む」

「櫂ってクールだよな♪」

「そうか？」

一夏が頑張って話しかけるが話が余り続かない。それでも諦めず櫂に話しかけてくる一夏をみて櫂は思う。

（三和もそうだったな…）

櫂は三和のことを思いだし少し苦笑した。

「クラス対抗戦の出場者を決めないといけない」

『織斑くんが良いと思います！』

『櫂くんも良いと思います！』

クラスの女子から推薦され一夏は焦るが櫂は興味がないという素振りだった。

「自薦他薦は問わない！他に候補者はいないか？因みに他薦されたものに拒否権はない……選ばれた以上は覚悟しろ！」

すると

「納得できませんわ！」

後ろから一人の女子が立ち上がって近づいてきた。

「そのような選出は認められません！大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このセシリアオルコットにそのような屈辱を一年間味わえと言うのですか！？」

さすがにこの言葉には櫂も不満で一夏は呆れていた。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき！それは私ですわ！」

セシリアが誇らしげに喋る。

「何せ私、入試出た唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。イギリス代表候補生である私以上に相応しい人間はいないはずですわ」

ここで一夏はあること疑問に気づきセシリアに聞く。

「入試ってあれか？ＩＳ動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試等ありませんわ」

「俺も倒したぞ？教官」

「なっ！？」

これにはセシリアも驚いた。

「あなたも教官を倒したというのですか！？わざわざこんな島国まできた上に極東の猿２匹と比べられるなんてこのような屈辱耐えられませんわ！！」

さすがにこれには櫂もキレた。

「イギリスも島国だろう？それに不味いメシしかないくせに」

「大してお国自慢もないだろ」

櫂と一夏の反撃にセシリアはわなわなと震えながらキレる。

「私の祖国を侮辱しますの！？」

「お前から侮辱してきといて何を言ってる？もう少し考えてから言え」

これも簡単に櫂に返されしまいには

「決闘ですわ」

「いいだろう…」

「四の五の言うより分かりやすい」

ここに櫂、一夏、セシリアの決闘が決まった。

するとそこに千冬が来て

「おちつけ馬鹿者！」

3人の頭を出席簿で叩く。

だが櫂は軽く交わしていた。

（千冬姉のあれを交わすなんて……）

「取り敢えず話はまとまったな。勝負は一週間後の月曜、放課後第三アリーナで行う！それぞれ用意をしておくように！」

「「はい！！」」

「櫂は私とＩＳについて勉強から始める！」

千冬が櫂に告げていると

「まさか知識からですとわ、そんなんで戦えるのですか？」

セシリアが馬鹿にしてきた。

これで完全に櫂に火がついた。

「一夏、コイツとは俺がやる！」

「えっ？でもよ」

「俺が戦う！」

櫂の気迫に圧倒され一夏は櫂に任せることにした。

その日の放課後、一夏は一人教室で参考書を開いていた。

（いくら櫂が戦うといったって俺も知識くらいは知っとかなきゃ）

そう思いパラパラと捲っていたのだったが

（ダメだ……全然わかんねぇ……）

一夏が悪戦苦闘しているとそこに山田真耶がやって来た。

「よかった、織斑くんまだ居たんですね♪織斑くんの部屋が決まりましたよ」

そういって鍵を渡してくれた。

「部屋は１０２５室です。荷物はもう届けてあると思いますので」

「ありがとうございます山田先生」

「それから櫂くんの部屋は向かい側です」

それだけ告げて山田は帰っていった。

（部屋にでも行くか……）

一夏が山田と話している同じ時、櫂は千冬と共にアリーナにいた。

これから櫂のＩＳの実力を見るためだ。

「念じるように集中してみろ！そうすれば起動するはずだ！」

そう言われ櫂は念じてみる。

するとグローブとポケットに入れてある櫂のデッキが光出して櫂を包み込んだ。

するとそこには赤を基調としたブラスターブレードのような姿をした櫂がいた。

「起動させられたようだな！これから練習を始める！」

こうして櫂の特訓が始まったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1254ba/

IS～先導者とイメージ～

2012年1月3日03時48分発行